

オンライン授業における教材教具へのアクセスと 人的交流についての考察

—ERT で見えた問題点と新しい可能性—

若月理恵

【キーワード】 緊急対応型遠隔授業 (ERT)、オンライン授業、教材教具、合同セッション

1. はじめに

新型コロナウイルスによるパンデミックの状況下、2020 年春学期の神田外語大学留学生別科では全講座が緊急対応型遠隔授業(Emergency Remote Teaching : 以下 ERT) で行われることになった。本稿では「日本語教育入門 5・6・7」「社会文化入門 1・2・3・4」の 2 講座について、教材教具へのアクセス及び人的交流に焦点を当て、事前に備えたこと、ERT 開始後に起きた問題点、ERT 期間を通じて感じた新しい可能性について述べ、最後に今後のオンライン授業への提言をする。

2. 通常時の講座概要

「日本語教育入門 5・6・7」「社会文化入門 1・2・3・4」に共通する特徴として、文法や作文など日本語習得のための講座ではない点、トピックの選定や分析対象は学生が広く選択できる余地を持たせている点、指定教科書を設定していない点が挙げられる。また、学部クラスとの合同セッションやボランティア参加を募ることで、日本人学生との交流を行なっている点も共通した大きな特徴となっている。以下にそれぞれの講座について、通常時の概要を述べる。

2-1 日本語教育入門 5・6・7

「日本語教育入門 5・6・7」は本国へ戻った後に日本語教師を目指す、日本語上級レベルの学生のための講座である。しかしながら、卒業後直ちにこの道を志望するケースは少なく、従って語学教育理論より分析力やプレゼンテーション力にも応用することのできる、より実践的なシラバスを採用している。授業の詳細は学生の意向を反映させながら決めるため、指定教科書の設定はせず、資料はその都度必要なものを選定している。

授業では初級クラスを想定した模擬授業を直接法で行う活動、及び留学生による学部生のための母国語講座の 2 つを大きな柱としている。前者の活動では「みんなの日本語初級 I 第 2 版 本冊」(スリーエーネットワーク)を参考資料として学期中継続して貸し出してい

る。他に必要な教科書、ワークブック、絵教材などはその都度留学生別科資料室より各自で借りる方式を取っている。後者の活動では学生が学部生に教えたい事柄を選び、母国語でダイアログを作り、1回完結の授業を提供するものである。視覚教材も各自で作成し、また提示するダイアログには母国語とカタカナを併記している。カタカナ表記には旅行ガイドブックを参照しているが、これらも留学生別科資料室で借りることができる。学習者役となる日本人学生は、学部クラスとの合同セッション形式にしたり、ボランティアを募る形式を取ったりしている。

2-2 社会文化入門1・2・3・4

「社会文化入門1・2・3・4」は学生の日本語初級から中級レベルの学生を対象としており、簡単な日本語と簡単な英語を使ったバイリンガル講座となっている。コース最初のユニットは、日本で生活する上で必要な知識を取り入れるためのインフォメーション・セッションで、その後のユニットでは日本の社会と文化について調査した上で、プレゼンテーションとディスカッションを行なっている。この講座でも学生が授業で話し合いながら調査内容などを決めるため、事前購入が必要な教科書の指定はしていない。講師側から提示する資料は私物か留学生別科資料室のものを使い、動画は YouTube⁽¹⁾、NHK for Education⁽²⁾などから無料配信されているものを利用している。多くの学生がプレゼンテーション時にスライドを活用しており、実物や印刷物などを持ち込む学生は少数派である。スライドの作成時にはインターネット上の素材や各自の写真などを利用していると思われる。

3. ERT 移行に際し予測された問題点と回避策

通常時の対面授業から ERT へ移行するにあたり、普段できていたことができなくなったり、そのままでは機能しないと思われることが数多くあった。この章では、事前に予測された問題点とその回避策を述べる。

3-1 インフラ関係

学生のインターネット接続環境、デバイスの配置は大学側が調整、対処を行った。その上で教育プラットフォームには Google Classroom⁽³⁾を、授業は Web 会議システムである Zoom⁽⁴⁾を利用した。さらに Zoom の不具合に備えて Classroom に付随している同じく Web 会議システムの Google Meet⁽⁵⁾とチャットアプリの Google Hangout⁽⁶⁾を別途設定した。

学習意欲を継続させることは、ERT 状況下では通常時よりも強く意識する必要があると予測した。藤本 (2019) では、ブレンディッドラーニング (blended learning) のアドバースではあるが、ゲーム性を取り入れることで興味を引き競争心も学習に利用することができると述べている。そこでクイズ作成機能のある Kahoot!⁽⁷⁾も予復習を支えるツールとして採用することにした。

3-2 教材教具

3-2-1 配布資料

プリントなどの随時配布は原則不可となったが、ERT 開始前に小冊子にしていたものの

み配布されることとなった。追加の配布物は全て Google Classroom を通じて提供することとした。

3-2-2 閲覧資料

「日本語教育入門 5・6・7」では通常時とは異なり、「みんなの日本語初級 I 第 2 版 本冊」が貸し出せないこととなった。このため、初級文法の分析などが困難になることが予想されたが、スリーエーネットワーク社より「みんなの日本語」が、三修社より「まるごと」が期間限定^⑧で無料配信されることになり、これらを活用することにした。

ERT 期間中は留学生別科資料室へのアクセスが禁止となり、「日本語教育入門 5・6・7」のクラスにとって教科書、ワークブック、絵教材などが閲覧及び使用できないことは大きな問題であった。そこで、模擬授業では、絵教材や視覚教材を多く準備する必要のある初級のみでなく中上級レベルも対象に入れ、学生が文法能力や作画など自分の得手不得手を考慮して項目を選べる様に幅を広げた。

一方「社会文化入門 1・2・3・4」では留学生別科資料室への依存は低く、特に問題にならないと判断した。

3-2-3 黒板

「日本語教育入門 5・6・7」では活動の中で板書したり視覚教材を掲示したりするのに使用する学生が多い。ERT では黒板の代わりにスライドや Zoom のホワイトボードなどを使う指示に変更した。

「社会文化入門 1・2・3・4」は前述の通り簡単な日英語のバイリンガルで行なっているが、どちらの言語でも特にリスニングが不得手な学生もおり、情報の共有や課題の確認に黒板はメディアとして大きな役割を持っている。ERT では毎回 Google Slide^⑨でレジュメを作り、それを Google Classroom に事前投稿、及び授業当日は Zoom でも画面共有ができるように準備し、黒板に代わる視覚面のサポートにあてた。

3-3 人的交流

Zoom は便利な Web 会議システムではあるが、参加者が一斉に発話したり、発話が交差する状況には対応できない。「日本語教育入門 5・6・7」では「母国語講座」を行うにあたり、教師役の学生が PC ではなくタブレットを使用している場合、Zoom の操作がしにくいことも懸念された。また、学習者役が初見の日本人学生のため、ただでさえ留学生側の負担は大きく、ERT ではこれらの要因を考慮して学部生を招いての「母国語講座」開催は見送ることとした。

「社会文化入門 1・2・3・4」は全体的に緩やかな枠組みにしており、コース開始直後の時点で学部クラスと授業の後半 45 分を使った簡単な顔合わせセッションを設けることができた。また、プレゼンテーションやディスカッションの際は画面共有をする以外に特別な操作の必要もなく、学生の負担が少ないことから、通常時と同様に合同セッションを開催することとした。それに先立ち、互いに相手のクラスの学生がどのようなトピックを扱うかを、Google Document で事前に共有することで、学生がセッションに備えられる様にした。

4. ERT で見えた問題点

前章で見たように、事前に様々な対処を施したが、実際に ERT が始まると想定していなかった問題も生じた。本章ではそれらの問題を見ていく。

4-1 インフラ関係

今回の ERT では Zoom を使用したが、iPad の年式によっては録画機能が使えないなど、想定外の制約があった。また、語彙の確認や質問を書くのにチャットの使用を推奨したが、iPad の場合はチャットボックスが画面の真ん中に出てしまい、画面共有中はチャットを閉じる必要があるなど、不便さを感じた。学生同士で意見交換やディスカッションをする際にはブレイクアウトルームを活用したが、一度ルームに入ってしまうと、講師や他のルームと交流ができなくなってしまう欠点があった⁽¹⁰⁾。講師からはブロードキャスト機能で各ルームに一斉通知ができるが、表示時間が短いため、大切な通達や細かい指示をするには適さなかった。さらに、複数のブレイクアウトルームに別れてプレゼンテーションやディスカッションを行った場合、講師側から全体を見渡すことができないため、そこでの活動を評価することができないことも、通常時には無い問題となった。

予復習には Kahoot! を、主として「社会文化入門 1・2・3・4」クラスで使用した。問題文と選択肢は簡単な日本語と英語の併記にしたが、英語話者と日本語レベルの高い学生が有利になってしまった。そのため、あらかじめクラスで問題文と選択肢を読み合わせて内容の理解をさせてからゲームを始める方式をとることで公平さが増したが、反面 Kahoot! に割く時間が大幅に増え、他の授業内容を圧迫することとなった。「社会文化入門 1・2・3・4」のように学生間で言語能力差がある場合、問題の出し方や選択肢を簡単にする工夫や、リアルタイムではなく好きな時に行える設定で行った方が、競争要素は半減するが公平かもしれない。

4-2 教材教具のアクセス

通常時に使っていた留学生別科資料室の教材教具にアクセスができなかったため、今期の学生は各自でインターネット上の素材を探すことになった。インターネットには数多くの素材があるが、玉石混交で取捨選択するにはある程度の技や経験も必要となる。初めての模擬授業では思うように進められないケースも見受けられ、困難さを感じた。

3-2-2 で触れたように「みんなの日本語初級 I 第 2 版 本冊」についても今期は貸し出しができなかったが、スリーエーネットワーク社のホームページより期間限定で閲覧することが可能となったため、これを活用した。しかし iPad で閲覧資料と文書ソフトを切り替えながら課題を行うのは困難だったようで、作業効率は悪かった。今後オンライン授業がある場合には、PC とタブレットなど複数のデバイスを標準とすることが、スムーズな活動につながるだろう。

黒板に代って Google Slide を使ってレジユメを作り、授業当日の目的や課題を提示した。これらは授業に先立って Google Classroom にも投稿されているので、授業でこのレジユメに沿って説明がなされている際、学生は Zoom 共有画面を見ながらでも、自分のデバイスで開きながらでも、どちらでも好きな方法を選ぶことができる。この手法そのものは講

師と学生の間で共通認識を築くことができ、役に立った。しかし授業中に課題の微調整や提出期限の変更が出た時、Google Classroom から学生に事前共有されているものにはその変更が反映されないことがあり、混乱を招いた。レジュメへの依存度が上がるほど変更部分への認識にズレが生じる結果となり、後から更新したレジュメやコメントが交錯するなど、講師学生共に負担を感じる要因となった。

4-3 人的交流

学部生との交流の中で、非言語コミュニケーションにいくつか摩擦が生じた。1つは留学生側の聞く姿勢についてで、学部生のプレゼンテーションを聞く際、カメラから離れ椅子の背にもたれているのは興味がないことの現れで失礼だという指摘であった。もう1つはディスカッションが盛り上がり沈黙が生じたときの対応で、学部生からは留学生が協力的ではなかったとの指摘を受けた。このコメントはクラスで学部生留学生双方の名前を伏せて全員に伝えたが、該当する留学生らを含め、特に座り方についての指摘には一様に驚いている様子だった。留学生は学部生のプレゼンテーションに興味深く面白かったとポジティブに捉えており、非言語部分の解釈に文化の違いが現れた形となった。いずれも通常時であればアイコンタクト、相づち、講師の介入などで回避できたかもしれない、オンライン授業の難しさが見えた場面であった。

5 問題解決案と今後の授業に応用できる新たな可能性

ERT では事前に予想しなかった問題も起きたが、通常時には気づかなかった発見や今後の授業に応用できる新たな可能性を見出すこともできた。本章では前章の問題への解決案とともに、ERT から新しく見出した可能性について述べる。

5-1 インフラ関係

教育プラットフォームには Google Classroom を使ったが、Zoom に不具合があったときのために Web 会議システムの Google Meet とチャット機能の Google Hangout の設定も別途していた。Google Meet については使う機会がなかったが、Google Hangout は授業当日に回線が不安定で Zoom に入れない、宿題の提出先がわからないなどという連絡にも活用できた。講師からは、授業に来ていない学生に体調を聞いたり、宿題が遅れている学生に進捗を聞いたりする場合にも活用した。これまではメールや Google Classroom のメッセージ機能を使っていたが、Google Hangout の方が返事が来やすいように感じた。ただしグループチャットの場合は既読がつかないため、Bonner(2020)にあるように Line⁽¹¹⁾や Line OpenChat⁽¹²⁾の活用が便利かもしれない。Google Hangout や Line など SNS を利用することで、4-1 でみた Zoom チャットの問題、ブレイクアウトルーム使用時のコミュニケーションの問題は解決されるだろう。

プレゼンテーションをブレイクアウトルームに分かれて行う場合、プレゼンテーションをリアルタイムから事前録画にして、Google Classroom などのクラウドシステムに共有しておくことで、評価の公平性を保つことができるだろう。また、Google Form⁽¹³⁾や動画投稿のできる Flipgrid⁽¹⁴⁾、投票機能のある Mentimeter⁽¹⁵⁾、クイズ作成のできる Kahoot!などを活用することで、フィードバックやリフレクションまで含めた双方向コミュニケーション活動の幅を広

げることにも可能となるだろう。

5-2 教材教具

黒板に代わる視覚教材として Google Slide を使用したが、事前配信したものについてはその後の修正が反映されない問題があった。この問題については、参加者が編集を同時に共有できる Google Jamboard⁽¹⁶⁾や Miro⁽¹⁷⁾といったオンラインホワイトボードに解決の可能性を感じる。Google Jamboard は編集と同時に共有、保存されていくため、後からアップロード版を配信する手間を省くことができる。また、これらのソフトには、付箋をつけたりそれらを並べ替えたりという作業も簡単に行えるという特徴がある。付箋にキーワードやアイデアを日英両言語で併記して見せることもでき、「社会文化入門 1・2・3・4」のような日本語レベルがまだ低く使用言語レベルに制限のあるクラスには、特にディスカッションなどの活動で大きな視覚的サポートとなるだろう。

5-3 人的交流

3-3 でも述べたように、物理的な移動がない分、相手クラスとの時間さえ都合がつけば、例えば授業の後半 45 分だけ同じ Zoom に入るなどということも可能となり、交流機会は作りやすかった。

ERT 開始時は予定していなかったが、学期の途中で学部のゼミクラスから交流会の誘いがあった。ここでは主にゼミ生が活動のイニシアチブを取り、事前に様々なシミュレーションをしながら準備をして、学生間の交流を楽しんだ。このような交流も、コロナ禍において場所の確保やソーシャルディスタンスなどを気にせずできる良い例となった。

授業外活動にはなるが、「社会文化入門 1・2・3・4」クラスでは、第 4 回から授業終了後に自由参加のコーヒーセッションを設けた。このセッションは授業から離れ日常の諸々をコーヒーを飲みながら自由に話す機会を与えることが目的で、各国の政治・政治家の問題、新型コロナウイルスの感染状況、ロボテックやアニメーターの特徴など、話題は多岐に渡った。第 10 回からは合同セッションを行った学部生も数名参加して、授業を超えた交流ができた。このような交流は、通常時には難しく、オンラインだからできた活動と言えるだろう。

6. おわりに

ERT という準備期間や使用できる設備に制限のある中で、問題点と同時に新たな可能性も見出すことができた。

教材教具の面では、出版物へのアクセスなど物理的なものを必要とする場合には困難さが残り、これらが電子書籍化⁽¹⁸⁾されることが待たれる。それまではインターネット上にある多くの素材の中から、質の良いものを取捨選択することになり、そのスキルを身につけることが課題となるだろう。

人的交流の面では、カジュアルな交流セッションなど、通常時に場所の移動を伴う活動の場合、その手間を省くことができ、手軽に採用することができことがわかった。反対に学生が教師役をする「母国語講座」など、学生 1 人に多くの負担がかかる活動は、引き続

き通常時の対面形式の方が行いやすく、必ずしも全ての活動がオンラインに対応できるわけではない。この場合はシラバスの変更を含む柔軟な対応が求められるだろう。

今後オンライン授業を行うにあたっては、特にリアルタイムで Zoom 授業を提供する際に、スライドや SNS のチャット機能を併用することで指示の徹底や円滑なコミュニケーションを図ることができる。また通常時のやりかたにとらわれず、プレゼンテーションは事前に録画、共有しておくなど新しい方法を取り入れることで、学生の負担軽減や評価の公平さを保つこともでき、また活動の幅も広がることが期待できる。さらに本稿で触れた Flipgrid、Kahoot! の他、教育現場でよく採用されている Miro (オンラインホワイトボード)、Mentimeter (投票機能)、Quizlet⁽¹⁹⁾ (クイズ作成) など、オンライン授業の一助となっているソフトに普段から慣れ、対面授業にもオンライン授業にも対応できる体勢をとっておくことも、今後の備えになっていくと思われる。

注

- (1) YouTube (ユーチューブ) <<https://www.youtube.com>>
- (2) NHK for School (エヌエイチケーフースクール) <<https://www.nhk.or.jp/school/>>
- (3) Google Classroom (グーグルクラスルーム) <<https://classroom.google.com/>>
- (4) Zoom (ズーム) <<https://zoom.us>>
- (5) Google Meet (グーグルミート) <<https://apps.google.com/meet/>>
- (6) Google Hangout (グーグルハンガアウト) <<https://hangouts.google.com/>>
- (7) Kahoot! (カフート) <<https://kahoot.it>>
- (8) 『みんなの日本語』はスリーエーネットワークより 2020 年 4 月 9 日から 6 月 21 日まで、『まるごと』は三修社より 2020 年 4 月 3 日から 6 月 30 日までの期間限定で無料公開された
- (9) Google Slide (グーグルスライド) <<https://www.google.com/slides/about/>>
- (10) 2020 年 9 月にリリースされた zoom 5.3.0 では、参加者もブレイクアウトルームを自由に選ぶことにできる機能が追加されている <<https://support.zoom.us/hc/en-us/articles/206476313>> (2020 年 10 月)
- (11) Line (ライン) <<https://line.me/ja/>>
- (12) Line OpenChat (ラインオープンチャット) <<https://openchat-blog.line.me>>
- (13) Google Forms (グーグルフォーム) <<https://www.google.com/forms/about/>>
- (14) Flipgrid (フリップグリッド) <<https://info.flipgrid.com>>
- (15) Mentimeter (メンティメーター) <<https://www.mentimeter.com>>
- (16) Google Jamboard (グーグルジャムボード) <<https://edu.google.com/intl/ja/products/jamboard/>>
- (17) Miro (ミロ) <<https://miro.com>>
- (18) 『まるごと』は三修社より電子書籍版も配信されている <<https://www.sanshusha.co.jp/np/blog/recid/61/>> (2020 年 10 月)
- (19) Quizlet (クイズレット) <<https://quizlet.com/>>

参考文献

- (1) 藤本かおる(2019) 『教室への ICT 活用入門』国書刊行会

- (2) Bonner, E. (2020) Using backchanneling to supplemental real-time lessons during emergency online learning. *Literacies and Language Education: Research and Practice*.
<<https://kuis.kandagaigo.ac.jp/eli/publications/wp-content/uploads/2020/08/9.-Bonner.pdf>>
- (3) Gill, A. (2020) Teaching during pandemic: designing asynchronous online material. *Literacies and Language Education: Research and Practice*.
< <https://kuis.kandagaigo.ac.jp/eli/publications/wp-content/uploads/2020/08/1.-Gill-FINAL.pdf>>
- (4) Hodges, C., Moore, S., Lockee, B., Trust, T., and Bond, A. (2020). The Difference Between Emergency Remote Teaching and Online Learning. *EDUCAUSE Review*.
<<https://er.educause.edu/articles/2020/3/the-difference-between-emergency-remote-teaching-and-online-learning>> (October 19, 2020)
- (5) Yoshida, A. (2020) Media presentations: Adapted for emergency remote teaching. *Literacies and Language Education: Research and Practice*.
<<https://kuis.kandagaigo.ac.jp/eli/publications/wp-content/uploads/2020/08/3.-Yoshida.pdf>>

資料

- (1) スリーエーネットワーク (編) (2012) 『みんなの日本語初級 I 第 2 版 本冊』スリーエーネットワーク